

国際協力特別賞

希望溢れる社会を目指して

和歌山信愛中学校高等学校 3年

熊崎 さやか

「自分じゃない誰かが、何かをいい具合に解決してくれる。そんな期待を抱くような大人に、ならないために。」

これは先日新聞で見つけたフレーズで私が心に残った文だ。未来を担う若者として、無責任な大人にならないように私たちに訴えかけているのだと思う。

世界をより良い社会にするために必要なこと。それは若者が夢を選択出来る自由があることだと思う。未来の地球を担う若者に希望と夢が溢れていれば、美しい社会になる。

日本では小さい頃は多種多様な大きな夢を持つ。だが成長するにつれて社会を知り、現実を見て、自分の夢が現実離れをしていることに気づき実現困難であることを知り、諦める。他にも社会の風潮的になんとなく勉強し、なんとなく大学に入り夢のないまま就職する若者もいる。

私は最近まで何のために勉強するのか分からず、将来の夢はなんですか？と聞かれることが一番苦手だった。そして、その度に「ないです」と答える私が嫌で仕方なかった。心の中で笑われるかもしれない、バカにされるかも知れないという気持ちと「別に普通に働けばなんでもいい」という気持ちがあった。

しかし、去年の冬にカンボジアに行き同世代の子と触れ合うなかで、正直日本の方が教育制度は整っているはずなのに、私の方が英語力が圧倒的に欠けていることがわかり衝撃を受けた。自分は何のために勉強しているのだろうか、と考えるきっかけになった。また、触れ合った時将来の夢を聞くと、学校の先生や警察官、医者など身の回りにある職業ばかりだったことが印象深い。

職業の選択できる環境であるにも関わらず、本当にしたいことを諦め、夢に対する情熱を無意識に奪っていく日本のような社会も豊かな社会とは言えない。同時に途上国の子供たちのように、そもそも世界中に無数に存在する職種や多様な働き方を知らないが故に自分らしさを発揮できない環境がある社会も、豊かな社会ではないと思う。

どうしたら豊かな社会になれるだろうか。

途上国の子供たちに多様な職種を知ってもらうためには教育は必要不可欠だ。教育という場所は正しい知識を学ぶことで、自分の知り得る世界観を広げるものになればいい。そうはいっても世界には教育さえも受けることのできない子供たちがたくさんいる。私はそのような子たちに学校に行くチャンスを提供できる人になりたい。直接現地に行き、教育支援に携わるという方法もあるが、子供たちが学校に行くことの弊害となるものを減らす支援の方法もある。毎日何時間もかけて歩いて飲む水を手に入れようとする子供たちがいれば、身近にあるものから飲む水を作り出すシステムを開発したい。そして、より多くの人を貧困から救い、そのことが学校に行くチャンスに繋がればいい、人間がテクノロジーを賢く扱えば持続可能な豊かさを手に入れる一歩に繋がると考えている。

また日本のような先進国ではまず私たちが「無知」な存在であることを自覚し、同時に自分の知

らない世界を知ろうとする姿勢が大切だと思う。カンボジアに行き、実際現地に行かないとわからない、カンボジアという国の良さを知ったように、自分の行動一つで自分の世界が百八十度変わることがある。その一歩を踏み出すことが難しいと感じたので、途上国の支援に携わると同時に日本人として日本の人に向けて日本のメディアでは紹介されない色々な国の魅力や文化を発信出来る人になりたい。私がしていることを少しでも多くの人に影響を与えられる、遠く離れた国のことに興味を持ってもらえるきっかけを作れる人になりたい。

自分の夢を叶えるための一つの手段が勉強であり、未来を担う存在として自分のしたいことを自分の好きな場所で一生懸命取り組み豊かな社会へと導ける人材になりたい。